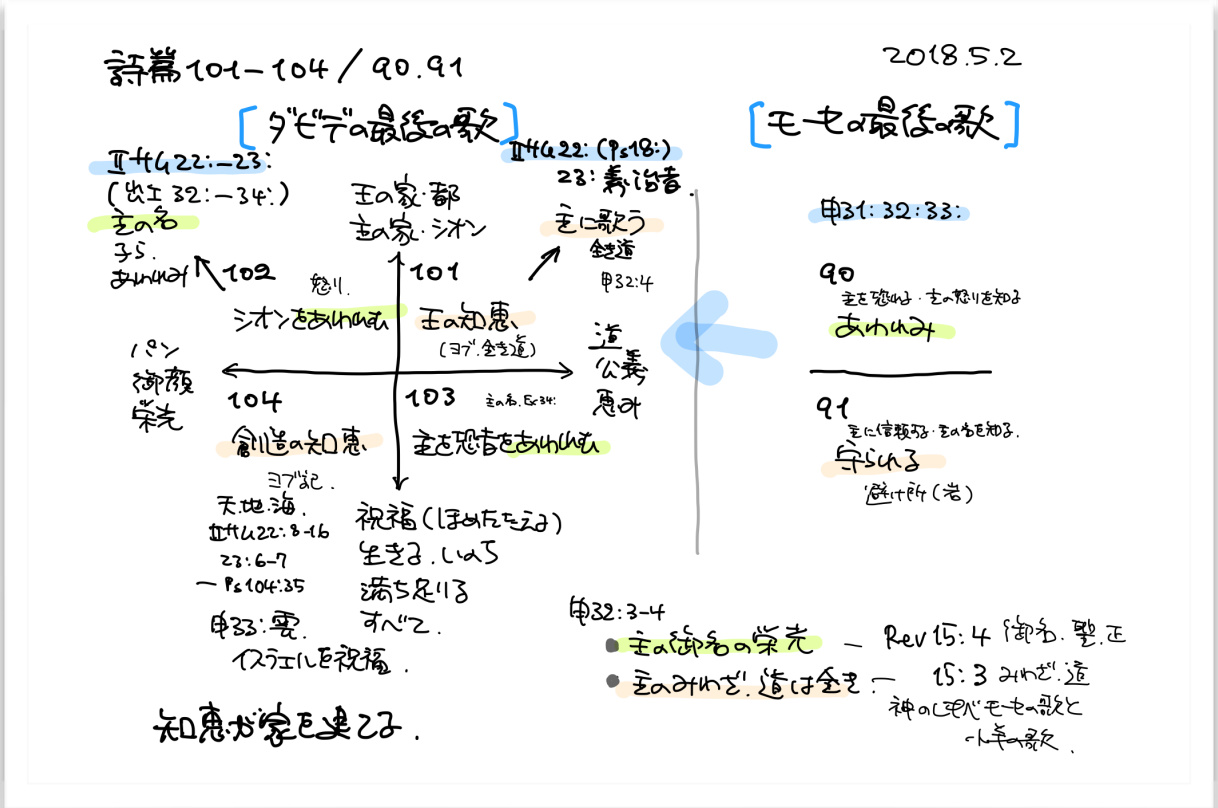
詩篇第４巻

詩篇90-106篇の配列構造



詩篇第4巻の101篇から104篇と、90篇、91篇のつながりを分析しました。101篇から104篇というものがセットであるということは、他のものを見てください。

民がつくられる(101-104,105-106)。安息の地に入れられる(90-91,92)。安息の地からシオンへという、この安息の地に入れられる、民がつくられる、祝福されるというところの並行を見ているということです。90-91篇、101-104篇は、主の名のあわれみ、主はあわれみ深い神様だということをほめたたえなさいというようなグループになると思います。

それで、103篇と104篇は、「わがたましいよ、主をほめたたえよ。(103:1,104:1)」「わがたましいよ、主をほめたたえよ。(103:22,104:35)」という言い方で終わっていますので、この2つ(103,104)がペアの詩篇だということがわかると思います。101篇と102篇。103篇と104。105篇と106篇も第1歴代誌16章で引用されて、長さも内容も似ていますので、105篇、106篇はペアだと。ですから、103篇と104篇の共通しているところ、101篇と102篇も共通しているところがありますね。101篇と103篇の共通点。102篇と104篇の共通点、斜め(101と104)(102と103)にも共通点が見られます。まとめるのが難しかったのですけれど、…下の2つ(103,104)が似ているので…主をほめたたえる、主を祝福する、ここには、生きる、命、満ち足りる、すべて、すべて、すべてというのが共通しています。101篇と102篇は、どういうところが似ているかというと、101篇は、神様が、これを書いた人、ダビデのような王様、都を支配している王様の家の話をしています。その家の話と、こちら(102)は、シオン、シオン、シオン、シオン、シオン…と。

これは、ダビデの都ということですから、「ダビデの都、主の家シオン」と、「王の家、都」と(いうことで)、住まいの話と、民が祝福されるということが、上(101,102)と下(103,104)を分けているものだと思います。

右側のほう(101,103)は、主を恐れる者。全き道を歩む、全き道を歩むという、「道、公義、恵み」、それに信頼している感じです。102と104(左側)は、「パン」が出てきます。「食べさせてくれる」「顔の栄光を見せてくれる」というようなことが共通かと思います。その共通点の中で、90篇、91篇との並行を見ると、斜めになっているところ(101と104)(102と103)のほうが、その共通のポイントになっているのではないかというように見ました。90篇、91篇。これが、申命記31章、32章、33章を連想する言い方が、たくさん入っているということです。モーセが死ぬ前の最後の歌ということと、最後の祝福という32章、33章ということですけれども、そのことばが使われていて、「主よわれらの住みかです」「いと高き方を住まいにしました」33章の「とこしえにいます神はあなたのすみかであり」この住みかということば自体は、3箇所に出てくるということから見ても、申命記33章、32章を一緒に見ないといけないのだということがわかると思います。90篇のほうは特に「あわれみ」あわれんでくださること、91篇のほうは「守られること」これが、中心的なテーマになっているようです。こちらで見ると、102篇、103篇は、(102は)シオンをあわれんでくれる。こっち(103)は、主を恐れる者をあわれんでくれる。主の名(102:15)、主の名(103:8,9)があらわされています。出エジプト記の34章の言い方が、103:8,9にあります。主の名であらわされるということが102篇、103篇の「主はあわれみ深い神様である、怒るのにおそい神様である」ということがあらわされているものだと思います。出エジプト記の32章から34章。それが特に90篇のあわれみ「主の怒り、憤り(90:7)」「主の怒り、憤り(102:10)」「主の栄光をあらわしてください(90:16)」「主の栄光をあらわしてください(102:15-16)」ということで、共通しているように見えます。

もう1つのほうの、101篇と104篇のつながりがわかりにくかったのですけれど、104篇を見て、いちばん思い出す聖書の箇所はというと、申命記ではないのですね。ヨブ記の神様が教えてくれる、ご自分をあらわしている神様の知恵、神様の創造の知恵について、38章であらわしてくださるところを思い出すような言い方が、たくさん104篇にあります。101篇のほうは、これもヨブのような者といえばヨブのような者で、全き道を歩む。悪を嫌って全き道を歩むということなので、こちらも知恵の話。知恵のある主を恐れるヨブのような王様、義しいあわれみ深い王様。そのあわれみ深い王様と神様の恵みの知恵が並行しているのではないかということで見ました。

90篇と91篇は、申命記のモーセの最後の歌、最後の祝福のところを思い出すようなことを言われていましたが、こちら101篇から104篇は…ということで見ると、第2サムエル記22章、23章。第2サムエル22章は、ダビデのストーリーの最後に、ダビデの歌ということで記録されています。サウルから救われたときということなので、死ぬ前ということではないのですけれど、ダビデの死ぬ前に、相続として与えているような歌としてここに書かれているものだと思います。ダビデの最後のことばということで、祝福のことばが23章にあるわけです。この22章、23章を思い出すような、つまり、詩篇18篇を思い出すような言い方がこちら(101篇-104篇)には多い。出エジプト記の主の名の話がありますけれど、32章から34章。それは、第2サムエル記の22章から23章の中に含まれているような感じですよね。ですから、ダビデの最後の歌(101-104)、「モーセが約束の地に入っていくよとこれを覚えていなさい」と言っている知恵の歌(90,91)。ダビデがこれから、新しい家をダビデの子が建てると言っているときに相続する知恵の歌(101-104)ということで、知恵が家を建てるとここに書いてありますけれど、この知恵が土台

になる。主の名に信頼する(90)。主の名に信頼して守られる(91)。これが、約束の地に入っていくときの知恵であるということが、この並行しているところの分析から言えることだと思います。申命記32章の出だしのところに「主の名をのべよう。われわれの神に栄光を帰せよ。主は岩であって、そのみわざは全く、その道はみな正しい。主は真実なる神であって、偽りなく、義であって、正である。」この知恵のない民よと言われている詩篇の出だしですね。それは、黙示録15章(3〜4節)に「神のしもべモーセの歌と子羊の歌とを歌って言った。あなたのみわざは偉大であり、驚くべきものです。主よ。万物の支配者である神よ。あなたの道は正しく、真実です。もろもろの民の王よ。主よ。だれがあなたを恐れず、御名をほめたたえない者があるでしょうか…」と言って続く、神のしもべモーセと子羊の歌という歌ですけれど、これは、申命記32章からきていると思われます。「主の御名の栄光」、「主のみわざ、道は全きものである」という、この2つのことが、特にあわれみと言っているところ(90,102,103)に、主の御名の栄光。主のみわざは完全で岩、道は全きものであって、主は変わらないその岩であるということが、こちらの知恵と書いてあるほう(91,101,104)の主の歌に、みわざ、そして神様の道を知っているという知恵。その神様に信頼するということが、もう一方の共通点になっているのではないかなということです。90篇が、102篇、103篇と。91篇が、101篇、104篇と特に並行しているというのが、こういうところから見えるものだと思います。

全体の第4巻で、岩なる王が民をつくる、民がつくられる、羊たちが集められるというときの主の御名。主のあわれみをほめたたえて(90,91)、この民がつくられていく(101-104)。その土台が「知恵」であるということが、この段落から言えることなのだろうと思われます。